

豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

「お味噌汁どうです。」

朝、風呂から上がって帰り際に声をかけられた。最近、温泉旅館などで風呂上りの休み処で色々と工夫をして、梅干とお茶であったり、冷たい甘酒であったり、もてなしをしてくれる。これはこれで風呂上りの楽しみの一つでもある。ここは、お味噌汁のサービスをしてくれる様で大きな貼り紙が二枚はってあり、午後三時から六時三十分迄はとろてんのサービス、朝六時から七時三十分迄はお味噌汁のサービスをしてくれるという訳である。

私もせっかくのお誘いであるので、少しにして下さいとお願いして頂戴したが、わかめ入りの熱い味噌汁はほんとうに美味しかった。汗をかきかき、ふうふう言いながらいただいていると、お孫さんを連れて八十前のおじいさん、おばあさんが通りかかった。味噌汁の係りのおばあさんがこの人達にもお味噌汁いかがですかと声をかけている。おじいさんは一瞬とまどっていたが、おばあさんに促されてテーブルに座った。

お孫さんは幼稚園児ぐらいの目のくりくりとした可愛い女の子でおじいさんとおばあさんに挟まれて座っている。味噌汁を運んできたおばあさんは女の子に話しかけたり、その女のこのことが可愛くて可愛くてたまらない様子でおばあさんとも話しをしている。そばでおじいさん



はにこにこしながらお味噌汁をすすっている。しばらくして、味噌汁を飲み終わったおばあさんが部屋へ帰るべく立ち上がったが、おじいさんは動かない。おばあさんは再度促しているが、おじいさんはじっとしたまま。

やがて、席を外していた味噌汁のおばさんが帰ってくるとおじいさんは「ごちそうさん」と言って帰っていった。たったこれだけの事ではありますが、私には一言お礼を言ってからでないと席を立てないおじいさんの気持ちが暖かく伝わってきて、なんとも言えない気持ちにさせてもらいました。おじいさんに我々が少しずつ失いかけている大切なものを教えていただいたような気がしました。

(ごちそうさん) 2007年執筆